



「人は何のために生き、死んでいくのか」
 幼いころ、祖父の死をきっかけにしてそんなことを考え始め、医師という仕事に興味を持つようになりました。
 佐賀県立病院での二年間の研修では、患者さんのところに検査室にと院内を走り回ったことや他の先生方と夜遅く飲みに出掛けた記憶しかありません。初期研修を終え三年目からは、現在勤務している小川島へ赴任となりました。

話を聞く大切さ

赴任当初は戸惑いの連続。正直つらいと感じることが多かったと思います。はつきりとした

最善の医療も人それぞれ

症状を訴えられる方はむしろ少なく、できる検査も限られてい
 ます。自分一人でウンウン言いながら、ない頭をひねることが多かつたようです。
 「今日診察した患者さんが、

その後悪くなっていないだろうか。何か見落としはなかったかと夜、不安で眠れなかった

ことも一度や二度ではありませ
 ん。しかし、小川島に来て、気付かされたこともいくつかあります。



3世代で暮らすおばあちゃんを往診。声を掛けながら血圧を測定する

唐津市小川島診療所

【私の勤務地】呼子港から6.5キロ沖の玄界灘に浮かぶ周囲4キロ、人口535人の小さな島。かつて、玄界灘の一番の捕鯨基地として栄華を誇っていた。現在は、呼子の名物となっているイカの一本釣りを主体とした漁業が行われている。小川島のイカは「どっちの料理ショー」に取り上げられたこともある。

まず一つは、患者さんの話をよく聞くことが、非常に大切だということ。頭が痛い、腰が痛いといって来られた方も、じっくり話を伺うと「いつの間にか痛まなくなった」と言われる方が少なからずおられます。

病気ではなく患者を診る」とはよく言ったもので、こうした経験を重ねることで、患者さんの話を聞き取ることの重要性を、より一層認識するようになりまし

「最期」は島で

もう一つは、人生もそれぞれ違うように、最善の医療も人によってそれぞれ異なるものだという事です。

病気だけをみれば、正しい治療を行ったとは言えないのではないかと悩みました。が、同時に患者さんの満足する治療の大切さ、難しさを考えさせられる経験だったと思います。

先日、八十代の女性の家に往診に行った時のこと。肺炎がひどく、入院して治療を受けなければ危険な状態でした。結局、本人の強い希望で、島で治療を続けることになりましたが、翌日その方は亡くなりました。ところが、ご家族は「本人の希望をかなえられた」と非常に感謝してくださいました。

最初の疑問に対する答えにはまだ至りませんが、少なくとも「小川島の方々の人生にかかわること」が、その答えの一つではないかと思っています。

総合病院で研修をしている

(次回予定は香川県)